

「小鍛冶 黒頭」の舞台の流れを紹介します。

～舞台進行と解釈

まず、舞台に居着く紋服姿の囃子方と地謡が登場します。

※能の共通設定で曲の演出ではありませんが、徐々に日常から切り離されていく舞台を観察ください。

その後、一条院からの勅使・橋道成が登場して、三条の小鍛冶宗近のもとを訪れます。

※この時、幕～橋掛り～舞台へと登場して語り出す道成ですが、再度橋掛りに戻り幕に向かって宗近に語りかけます。これは、橋掛りと舞台が場面転換に使われていて、舞台の空間としてはまったく別の場所であること、道成の出てきた幕と語りかける幕は別であると覚えておいて下さい。

道成から命を賜った宗近は「稻荷明神」に祈願していると遠く（幕内）から宗近に言葉をかける少年が現れます。

童子「あなたは宗近ですよね」

宗近「私の名を呼ぶあなたはどなたですか？」

童子「天上人の帝から剣の勅命が下りましたよね？」

宗近「え！？今賜ったばかりの宣旨をなんで??」

童子「今の世の中は何も隠すことが出来ないんだよ」

といった会話が交わされ、かなり一方通行な会話ですが、童子は今の御代の有難さを語っているわけですね。

そして童子は刀にまつわる故事を語り出します。

※舞台では地謡が代わりに謡う様子が続いて立ち役達は舞台に居着いてじい～っと我慢しています。

語られている内容とは代々の御代を名刀が護ったとのお話。

唐土の故事は「静」の場面で、漢王（劉邦）は三尺の剣を掲げて兵を起し、秦を滅ぼした。煬帝（隋王）はけいの剣をもって周を滅ぼした。玄宗皇帝の時代には鍾馗大臣の亡魂が剣にこもり朝廷で悪鬼を退治した。

日本の故事は「動」の場面で、我らが日の本に神代より伝わる三種の神器にまつわる話。景行天皇の皇子・日本武尊が東国平定の際にある剣を帯して東へ下ります。途中、敵の謀略によって四方の枯れ草に火をかけられ焼き殺されそうになるが、尊は剣を抜いて草を薙ぎ払い、剣の精霊は嵐となって天地に満ち、猛火を吹き返して敵を滅ぼしたのでした。故にその剣を「草薙剣」と呼ぶのです。その後、四海が治まり、人家の戸ざしを忘れても賊の入らないそんな治世はこの剣のお陰です。そして、今宗近が打つ刀もこの剣に劣らないモノになるだろう、鍛冶の道を伝える者として安心して帰宅しなさいと告げます。

さらには鍛冶支度をして待っていたら相槌しにくるからね～と足早に消えてしまいます。

ここまでを、私・隆之が舞います。

後場、下人に祭壇を準備させる宗近は、やがて祭壇に臨んで祈願し始めます。刀匠として日本の武器の始まりをイザナギ・イザナミの御矛とし、ナンセン（須弥）ソウカタコク（天竺）アマクニヒツキ（大和）の子孫へと継がれてきた道である。故に、私欲ではないのです、諸神よ、私に御力を～～！と祈念したところ稻荷明神が来現しちやいます。

今回は父が務めます。

共に打つその鍛刀の鋤の音は天地に響くほどです。そして、仕上がった刀を、天下第一の、二つ銘（宗近・小狐）、み剣、四海を治め、五穀成就と言葉遊びを交えて称えながら勅使に献上し、明神は東山へと帰って行きます。

さて、能の装束には様々な意味が隠れていますのでご紹介。

例えば頭の上に動物や草木を戴いていればそれは現代の着ぐるみと近い意味でキャラクターを指します。通常の小鍛冶では後シテが狐を頭の上に乗せて登場します。

で、お稲荷様です、能って解りやすいですよ？

今回は「黒頭」という「小書（コガキ）」が付加されていますが、通常演出と異なる事を指していて、謡や所作を通常より色濃く表現し、緩急が増えます。前シテの扮装がスタイリッシュな「裳着胴」に変わって、頭髪もどことなくヤマトタケルを印象づける「カッシキ鬘」となり持ち物も扇ではなく、「稲穂」。登場した時から、品格高く、お稲荷様ですよ～、神様ですよ～ってバレバレです。後シテの紛争も前同様に身軽になり、頭髪は「黒頭」。そうです、狐は戴きません。小書は通常演出を知ってる人がより楽しむ事を前提に演出されているのですね。

ちなみに通常は「赤頭（赤い髪）」で黒くなることは勇壮さへの誇張表現、「白頭（白い髪）」もあってこれは人格化された老体。梅若家には「白式（白いけど若い）」という演出まであります。